

第五十章

ニューロコンピュータ

【時】永久0288年（前々章より約14年後）

【空】鍵穴星

【人】瞬示 真美 ホーリー サーチ フォルダー 巨大コンピュータ

ここは別の宇宙空間なのか。数えきれないほどの火炎土器が怪しげに赤く輝きながら漂っている。今度はアラジンの魔法のランプから大男が出てくるように、ほぼ瞬間的に火炎土器から次々と物体がひねり出される。まず鍵穴星と小さな太陽が現れる。その鍵穴星の地表にはカシオペアの残骸やブラックシャークが見える。巨大土偶もいるがその姿はすぐに消える。

ブラックシャークの中ではまるで急ブレーキがかかったバスの乗客のように全員が艦橋の奥で折り重なって倒れている。

「ジ・ク・ク・ク・ワ・ン・ン・が・正常に・戻りました」

中央コンピュータが気を失ったフォルダーたちに報告を繰り返す。

「時空間が正常に戻りました」

「大丈夫か！」

意外にも一番下のホーリーが真っ先に叫ぶ。しかし、声にしたのはそれだけで全身を走る激痛にうめく。徐々にひとりずつ意識が戻る。上にいる者は下にいる者がクッションの役割をしていたためか、ケガひとつしていない。山のように折り重なったところから這うようにして降りると、立ちあがろうとする者の手を引っばる。どうにか全員立ちあがると「大丈夫？」「大丈夫か」と、口々にお互いを見合わず。

「いったい何が起こったんだ？」

ようやくフォルダーが中央コンピュータに説明を求める。

「よくわかりませんが、時間が収縮したのは確かで、今は正常です」
痛みを忘れてホーリーが強い疑問を中央コンピュータに向ける。

「時間が収縮？戻ったんじゃないのか」

「いいえ、収縮です」

ホーリーに替わってフォルダーが声をあげる。

「収縮でも、逆行でも何でもいい。現在位置は？」

「鍵穴星にいます」

「ニセモノの神は？巨大土偶は？」

「いません」

ホーリーがフォルダーの言葉をかいくぐる。

「時間はどうなった？」

「わかりません」

ホーリーがまわりを一巡する。みんな若いままだ。

——時間島に包みこまれたのではなさそうだ

中央コンピュータが全力を投じて懸命に現状を把握する。

「ここは元の世界、元の宇宙です。宇宙の地平線の内側に戻っています」

「星が見えるわ」

サーチが艦橋の窓から上空をながめる。

「巨大土偶が俺たちを元の宇宙に戻してくれたのか」

ホーリーは何かを探すようにサーチと反対側の窓に近づく。

「あの小さな太陽が消えた！」

「消えたわけではありません。現在、鍵穴星の向こう側を周回中です。あの小さな太陽のお陰で鍵穴星の温度が上昇して巨大土偶が生まれ、火炎土器が活性化したと推定されます。どうやらワレワレは火炎土器の中に吸いこまれて元の宇宙に戻ったようです」

「火炎土器に吸いこまれた？冗談はよせ。それとも狂ったのか」

「いいえ、記録を精密に精緻に綿密に分析した結果、そうとしか考えられません。ワタシが狂うことはありません」

「おい！あれは何だ。宇宙の地平線というのは肉眼で確認できるのか」

全員ホーリーが指差す窓に押しよせる。天空に白い線が左右に広がっている。

「いいえ、宇宙の地平線ではありません。よく見てください。巨大な壁です」

中央コンピュータが興奮する。白い線は横に伸びているだけではなく、その上にも下にもそしてたてにも数えきれないほど見える。まるで黒い紙の上に薄い白い線が縦横直交して方眼紙のように見える壁が広がっている。

「間近なので方眼紙のように見えますが、とてつもなく大きな球体です。直径は……」

中央コンピュータが直径を計算する。すぐに答えが出ないほど大きな球体なのだろう。

「直径は約三十光年。先ほどまでワレワレがいた宇宙の地平線の向こう側で巨大コンピュータが造ったという宇宙と同じ大きさです。大きさの割には引力が弱すぎます。しかも安定していません」

「安定していない？」

「目の前に見える方眼紙のような壁をよく見てください」

徐々に目が慣れてきたせいか、一つひとつのグリッドがくつきりと見える。やがてそのグリッドは小さくなって鍵穴星からどんどん遠ざかる。

「今、時間が縮んでいます。恐らくある程度まで縮むとまた膨張すると思われます。ワレワレが先ほど見たときが最大だったようです」

「よくわからん。やさしく説明しろ」

余裕ができたのか、フォルダーの口癖が始まる。ホーリーも次の説明に期待を寄せる。

「うまく説明できません」

——時間が進んだり後退したりしているんじゃない。縮んだり、膨張したりするというのは何を意味するんだろうか？

がっかりしながらホーリーは心の中でつぶやく。

鍵穴星のある場所で火炎土器が地面に突きささっている。その火炎土器から二羽の埴輪はにわの鳥が首を出す。まわりを伺うように首を上下左右に小刻みに動かす。火炎土器のふちにたどたくしくよじ登って翼を広げると飛びたつ。初めは翼を上下に動かしているが、やがてたたむと加速する。速度が上がるにつれ徐々に緑色に輝きはじめると姿が消えて、二本の緑の光線となつて螺旋らせんを描くように鍵穴星の裏側に向かう。緑色の光線はひとつになり丸い球体に変化して緑の時間島となる。その中に人影が浮かびあがる。瞬示と真美が抱きあっている。

【見える？】

【見える。グリッドが大きくなったり小さくなったりしている】

【洞窟の滝の上で見た空のこと覚えている？】

【あのときといっしょだ。時間が進んだり後退したり、いや、縮んだり膨張したりしている】

【縮んだり膨張したりっていう感覚は今までなかったわ】

瞬示が真美の素朴な感覚に驚く。

【ひよっとして時間は前後だけではなく左右や上下にも動くということかもしれない】

瞬示は次元を超えた時間の感覚を何とか表現する。しかし、瞬示の時間に対する重要な感覚を理解することなく、真美は時間島の外の景色に目を奪われる。

【あつ、今度はグリッドがどんどん小さくなるわ。どんどん遠ざかっていくように見えるわ】
瞬示は体得した重要な感覚を放棄して真美に同調する。

【無限に広がっている壁のように見えていたけれど、これは球体じゃないか】

ふたりが観念的に見つめる光景はブラックシャークの連中が見ている光景と同じものだ。鍵穴星の向こう側の宇宙の地平線の方向に見えるグリッドは巨大な球体のほんの一部だ。現れた当初は時間が止まっていた。やがて巨大な球体の中で時間が誕生するがとても不安定だった。それはまるで時計の針がどちらに進んでいいのか迷っているような状況だ。しばらくして時計の針は進む方向を決めて動きだす。しかし、針はどうも反対の方向に動きだしたようだ。

【過去に向かっているような感じがする】

ふたりを包む緑の時間島はまっしぐらに縮みだした巨大な黒い球体を追いかける。

【すごい速さだ】

【追いつけるかしら】

緑の時間島の色が薄くなる。時間をさかのぼっているせいか、やがて薄い黄色になって、そして色が消える。

【あれは！】

黒い球体がさらに縮む。完全な球体ではなく表面にはいびつな模様が刻まれている。しばらくすると今度は時間島に色が生まれて薄い黄色から元の緑に戻る。

【ずいぶん小さくなったわ】

【それでも太陽系よりはずっと大きいに違いない】

【ピンクの光線が球体のまわりをはいまわるように点滅している】

【まるで……】

ふたりはツバをぐくつとのみこむような感じで叫びあう。

【まるで、脳だ！】

【黒い脳だわ！】

ふたりは驚きの頂点を登りつめる。真美がその頂点から転げ落ちるように信号を瞬示に送る。【今まで死んだ全人類の脳があそこに集まっているような感じがする！】

表面は人間の脳と同じようなシワがあり、ほぼ丸い形をしている。その表面をピンクの光線が現れると様々な方向に流れては潜るように消える。そのような無数のピンク色の光の流れがこの巨大な球体のあちらこちらに見える。そしてこの球体はまるで呼吸するように大きくな

つたり小さくなったりする。

ふたりの緑の時間島がどんどん黒い球体に接近する。その視界がもはや球体とは認識できないほどのところまで近づく。やがて目の前に巨大な黒い壁が立ちはだかる。

【なんと巨大な……星……いや、ブラックホール？違う！】

瞬示が言葉を失う。確かに黒いが透明な暗闇のように見える。数えきれないほどのピンクの光線が相変わらず現れては消える。光線というよりはピンク色の巨大な火の玉が一瞬のうちに現れて彗星すいせいのような尾をしたがえてあちこちを飛びまわって潜るように消えてはまた現れる。まるで太陽の紅炎こうえん（プロミネンス）のようで音は聞こえないが豪快な光景だ。

瞬示が何とか信号をふりしぼる。

【巨大な悪魔の脳】

【戻りましょう！】

真美が哀願する。そのとき「ドク、ドク、ドク」という重々しい低い音がふたりを包む。

【わかった】

しかし、緑の時間島はなおも進んでいく。いくつもの壁を突きぬけて巨大なピンクの火の玉をたくみに避けながら進む。まわりは黒い液体のように見える。瞬示には見覚えのある黒い液体が超巨大な星の中につままっている。

【この黒いものは……】

すぐに瞬示は思い出す。それは真美があのだ民宿でサーチに分子破壊粒子という毒物を飲まれたあと、その毒物を体外に排泄していた光景だった。

【あのととき真美の身体から黒い液体のようなものが全身から排泄されていた】

【記憶にないわ】

【あれと同じものではないと思うけれど、感じがよく似ている】

【なぜ時間島はわたしたちの意志を無視して進んでいくの】

やがてピンクの火の玉が消えて暗黒の世界となる。恐らく巨大でいびつな球体の中心に近づいているのだろう。暗闇でも視力が衰えないふたりの目をもってしても何も見えなくなる。

【怖いわ】

【あれは】

遠くでキラキラと輝く細い糸のようなものが見えはじめる。実際はかなり太いがふたりには糸のように見える。まわりがその光でほんのりと明るく見える。無数の糸のようなものが鈍い白い光を発する。絡みあつてその量がどんどん増えていく。

【いやだわ、あの糸かしら】

瞬示も思い出す。入口が血で染められた洞窟に入ったときマユのようなものに包まれた無数の胎児と同じものが目の前に現れる。真美が瞬示にすり寄る。

【これは胎児じゃない！巨大土偶だ！糸の中にいるのは巨大土偶だ！】

巨大土偶の身体から無数の糸が出ている。そして巨大土偶はその無数の糸の中で身体を折るようにならずくまっている。あちらにもこちらにも数えきれないほどの無数の巨大土偶がまるで胎児のように丸まって薄く輝く白い無数の糸の中でじつとうずくまっている。胎児でない分、恐怖心が薄められたのか目を閉じることなく巨大土偶をじつと見つめる。そのうち、まわりが透明の世界から白濁したような緑色の世界に変化していく。ふたりは緑の時間島を自由自在に操ると白い糸がはじけて溶けるように消える。

【無駄だ】

低い音のような信号がふたりに届く。

【誰だ！】

【神だ】

【神！？】

【数えきれない無数の宇宙すべてを支配する神だ。時空間を移動できる程度のおまえたちなど神の前では無力な存在に過ぎない】

ふたりが使う同じ信号が送られてくる。

【巨大土偶はよみがえることはない】

【どこにいる？姿を見せる！】

はるか彼方の正面からピンクの火の玉が現れる。どんどん膨張してふたりに向かってくる。

【あんなのにぶつかったら、ひとたまりもない】

いつの間にか糸の縛りから解放された巨大土偶が次々と背伸びをする。正面のピンクの巨大な火の玉に向かう体勢を取ろうとする巨大土偶の姿がふたりのまわりで何万いや何億いや何兆と見える。まわりは巨大土偶だらけで、それ以外は何も見えないほどになる。

【何が起ころんだ】

瞬示は何とか信号にするが、真美は瞬示に抱きついて口を半分開いたまま、うつろな視線をまわりに向ける。

【まるでピンクの太陽がこちらに向かってくるように見える】

無数にいる巨大土偶は巨大な火の玉と比べれば、全部合わせてもチリのひとつにも満たない大きさだ。それなのに数えきれないほどの巨大土偶が薄羽蜻蛉うすはかげろうのように太陽のように見える物体に向かって集結する。

【まさか、突っこんでいくんじゃ？】

【そんな！】

頭を抑えつけるような声が後方から響く。

【神の意志を受けてみる！】

瞬示が振り返る。暗闇の中にうつつすらと白く輝く正三角錐のようなものが見える。そのど真ん中に薄いピンクの球体がおぼろげながら見える。かなり遠くにあるようにも見える。瞬示は

なぜか急に一太郎の言葉を思い出す。

「脳の中では、ニューロンとニューロンとの間をシナプスというものを介して信号が伝達される。つまり脳はニューロンというネットワークを持っている。将来ニューロンと同じ機能を持つコンピュータが出現するかもしれない」

瞬示は直感的に正三角錐がニューロンで、こちらに向かってくるピンクの巨大な火の玉に見えるものがシナプスだと理解する。そして今いる巨大な黒い物質は一太郎が言っていたニューロコンピュータではないかと瞬間的に確信する。

【マミ！あれを破壊するんだ】

瞬示が真美にイメージそのものを送る。ふたりの身体から緑色を通りこして群青色に近い光線が発射される。次の瞬間、正三角錐の中心にある薄いピンクの物体を包みこんで消滅させる。ふたりは集団となった巨大土偶のすぐ近くまで来ているピンクの巨大な火の玉を見つめる。何万體もの巨大土偶が次々と解けるように消えていく。

【だめか！でも行き場所を失ったシナプスは消えるはずだ】

瞬示がそう考えたとき、大きな振動が起きてまわりは真っ暗になる。

【消えたわ】

遠くでピンクの小さな光の点が現れる。

【次のがくる！】

【どうなっているの】

【正三角錐の物質を探すんだ】

光源と自分たちの位置を結ぶ反対側の線上に正三角錐の物質が存在するはずだと、真美だけではなく無数の巨大土偶にも瞬示はイメージを強い信号にして送る。

【あれだ】

【あそこにもあるわ。あつ、あそこにも】

瞬示と真美を包む時間島は光速に近いスピードで巨大な正三角錐のひとつに近づいていく。瞬示がシナプスだと思っているピンクの巨大な火の玉が太陽ぐらいの大きさがあるとすれば同じくニューロンとと思っている正三角錐はその数倍はあり、その中の核のような白い球体も太陽ぐらいの大きさがある。

【かなり離れているように見えるけれど、この超巨大な黒い物質の中には何億いや何兆とあるんだらう】

瞬示がため息をつく。一つひとつ破壊してもすべてを破壊することは不可能だ。

【どうしようもない】

瞬示と真美は時空間移動の体勢を取る。時間島が収縮しはじめる。ピンクの巨大な火の玉にぶつからなくても、そのそばを通るだけで時間島といえども瞬間的に消滅するだらう。

瞬示と真美は鍵穴星で御陵のような形をした前方部分に立ってはるか彼方を見つめる。足元には火炎土器が転がっている。

【巨大コンピュータが怪物みたいな脳になっていた】

はるか彼方にある巨大な脳がふたりにはボールのように見える。

【巨大土偶はどうなったのかしら】

真美が瞬示に身体を寄せる。

【いったい巨大コンピュータの目的はなんだ？】

【わたし、普通に生きたい】

真美が目を閉じて逃げだしたい衝動を訴える。

【ぼくらは何のためにこんな能力を持たされたんだろう】

【女と男が仲良くなったまではよかったのに】

【あの巨大な脳の形をしたものが神なら、ぼくらの秘密を教えてくださいな】

【瞬ちゃん、サーチやホーリーはどこにいるの】

【あいつは神じゃない。悪魔だ】

【ねえ、瞬ちゃん！わたしの話を聞いているの？】

瞬示が黙ると、そのとき何かざわめきのようなものが聞こえてくる。

【聞こえる？】

鍵穴星に小さな太陽が昇りはじめる。まわりが急に明るくなり、この小さな太陽の光が邪魔をして遠くに見えるはずの巨大な脳の姿を消してしまう。ふたりはまぶしそうに太陽を見つめる。アンドロイドT W 5が作った太陽だ。

【いつの間にあんな太陽ができたんだ】

真美も驚きの表情でまぶしそうに太陽を見つめる。

【聞こえる！ホーリーの声だ】

【サーチの声も聞こえるわ】

ふたりは抱きあうようにして宙に舞うとき火のような光を発見する。その近くにブラックシャークが見える。ふたりの姿が消える。

第五十一章
多次元エコー

第四十七章から前章（第五十章）までのあらすじ

宇宙の地平線手前の鍵穴星へブラックシャークが宇宙戦艦と時空間移動すると巨大な紫色の時空間移動装置も鍵穴星の上空に現れる。そして「神」と名乗って戦艦を宇宙の地平線に追いつめる。

住職が論戦を仕掛けると巨大コンピュータが無限後退におちいる。巨大時空間移動装置の回転が加速すると空間がねじれて宇宙の地平線から押しよせたエネルギーによつてすべてが不安定な狭い空間に閉じこめられる。ブラックシャークの被害は軽微だったが、宇宙戦艦は壊滅的かいめつな被害を受ける。そして巨大コンピュータは大きさがわからないほどのニューロコンピュータに進化していた。

航行不能となったカシオペアの核融合炉が小さな太陽になつて鍵穴星を暖める。やがて鍵穴星のいたるところで前方後円墳が形成されて巨大土偶が生まれる。そして何もかもが火炎土器の中に吸いこまれて火炎土器自体も消える。すべてが元の宇宙に戻ったあと瞬示と真美が巨大なニューロコンピュータに時間島で突っこむ。

【時】永久0288年

【空】鍵穴星

【人】瞬示 真美 ホーリー サーチ ミリン

フォルダー イリ 住職 リンメイ ミト R v 2 6 巨大コンピュータ

ブラックスチャークの艦橋に突然、瞬示と真美が現れる。

「今までどこにいたんだ？」

ホーリーがふたりに詰めよる。サーチがホーリーを押しつけてやさしくふたりに声をかける。
「無事だったの！よかったわ」

ホーリーは余裕のない自分の態度に反省しながら緊急事態を説明しようとするが、何から話していいのか空回りする。瞬示と真美が混乱するホーリーの心の中をのぞく。断片化されたホーリーの意識をデフラグするようにして吸収する。

すぐにサーチは沈黙を続けるふたりがホーリーの心をのぞいていることに気付く。ホーリーやサーチ以外の者も微動だりしないで神経を集中するふたりを黙って見つめる。

「巨大コンピュータはとてつもなく巨大な、ひよっとしたら銀河と同じくらいの宇宙空間を占めるニューロコンピュータになっていた」

「巨大土偶が戦いを挑んでいるの。ニューロコンピュータに」

「とても勝ち目はない」

「わたしたちの力ではどうにもならない。ニューロコンピュータは恐ろしいほど巨大なの」

真美の目から涙があふれる。ホーリーがやっと投げだすような言葉を出す。

「瞬示と真美でさえ手も足も出ない相手じゃ、どうしようもないな」

サーチがホーリーのあきらめに似た言葉に落胆しながらふたりにたずねる。

「巨大コンピュータのノイズ攻撃のとき、どこへ行ったの」

「あのとき、前線第四コロニーの巨大コンピュータがいるはずの場所に瞬間移動した。でも、そこには巨大コンピュータはいなかった」

真美がすぐに瞬示の言葉をつなぐ。

「どうもノイズのせいで空間移動に失敗して、一日先の世界に間違って時空間移動してしまっ
たようなんです」

「瞬示や真美が間違おう？それにノイズの影響まで受けたのか」

ホーリーが驚く。

「ぼくらにとっても気持ちの悪い雑音だった」

「そのあいだにホーリーとカーンの大活躍でノイズの発信源を破壊したから、わたしたち、何
の役にもたたなかつたわ」

「ただ、ふしぎなことに巨大コンピュータがいなくなった空間に、突然赤い炎が現れて、なんと言ったらいいのか……」

瞬示が目を閉じて何かを思い出そうとする。真美も同じように目を閉じて瞬示の言葉を受けついでポツポツとしやべる。

「確か、その赤い炎の下にはごつごつした土器のような……」

瞬示が思い出したと言わんばかりに声を張りあげる。

「火炎土器だ！ あれは確かに火炎土器だった。中学か高校の時、歴史の授業で……。とにかく火炎土器がぼくらを吸いこんだ。次の瞬間、とてつもなく巨大なニューロコンピュータがいるところへ移動した」

瞬示と真美の説明をさえぎってリンメイが発言する。

「ひよつとして、私の研究室の火炎土器が前線第四コロニーに移動したのかしら」

リンメイが研究室の棚から消えた埴輪はこわの鳥と火炎土器のことを思い出す。

「ノイズが流れてから一日後なら、可能性はある」

ホーリーが大きくうなずいて瞬示を見つめる。

「火炎土器は宇宙と宇宙の架け橋のような感じがする」

真美が瞬示に大きくうなずく。

ホーリーは想像を絶する現実が存在していることに脱力感を覚える。ホーリーだけではない。

全員の頭が真っ白になる。

「巨大コンピュータはいつの間にかとてつもなく大きなニューロコンピュータに変身したとでも？大きくなればいいって言うもんじゃないだろうに」

ホーリーが弱々しくつぶやく。

ホーリーを中心に瞬示と真美がもたらした情報の加工が始まる。驚きばかりの会話がだんだんとため息混じりの会話に変化する。そしてあきらめの沈黙が支配する。その沈黙を破ったのはフォルダーの力強い言葉だった。

「しかし、ニセの神ははるか彼方でじっとしたままじゃないか」

フォルダーは海賊らしく、まだ勝機があるとにらんでいる。

「巨大すぎる」

ホーリーがそう言ったとき、フォルダーの声が届いたのかニセの神の声が聞こえてくる。

「偉大なのだ。神に逆らうことは許されない」

重々しく低い響くような声流れる。

「神は直接、人間の目の前に現れないものじゃ」

若くなつた住職が天井に向かってすぐさま反論する。一瞬、神の声が途絶えるが再び低い声がする。

「おまえたちは幸せ者だ。神の姿を拝んだのだから」

「神はなぜ人間の脳みそのような形をしているのじゃ」

「おまえたちの方が神をなぞっているのだ。愚かな人間は神に近づこうとして脳を持つようになった。その脳で言葉を使うようになり知恵がついたが、その知恵を神から授けられたのも忘れて悪行の数々を行うようになった。そこで元の姿に戻さなければならなくなった」

「なぜ今なのじゃ」

「そうだわ！今の人間は平和を追い求めているわ。平和を乱したのは巨大コンピュータの方だわ！なぜ神様が平和をぶっこわすの？」

真美が叫ぶ。そして住職が力強く言葉を繰り返す。

「それに人間は神の名を語って戦争することもなくなった。なぜ、今、神が現れなければならぬのじゃ」

神からの声が完全に途絶える。瞬示は何かを仕掛けてくるような感覚を持つと大声で叫ぶ。「鍵穴星から脱出するんだ！急げ！」

「全速離脱！」

中央コンピュータの音が船内に響く。

「強力なエネルギー波が接近！」

イリが叫ぶ。瞬示は自分の予感に自信を持つ。

「時空間移動だ！」

フォルダーの命令をかき消すように中央コンピュータが警告する。

「時間がロックされました。時空間移動できません。全員対シヨック体勢を！」

【鍵穴星が吹つとぶぞ】

【強力すぎるわ。このエネルギー波は】

【ブラックシャークを瞬間移動させよう】

ふたりの身体が緑色に輝くとブラックシャークの船内はもちろんのことブラックシャーク本体が緑色のベールに包まれる。鍵穴星からブラックシャークが消えて鍵穴星が月の大きさぐらいに見えるところまで瞬間移動する。そのとき鍵穴星が大爆発して粉々になるとすさまじい光を発して、飛び散った星の破片が光速まで加速する。

【まずい！もう一度瞬間移動だ！】

「反転！使える主砲で向かってくる鍵穴星の破片を破壊しろ！」

フォルダーが怒鳴る。すぐさま主砲が自動照準体制に入る。

「多すぎる！速すぎる！」

再び船内が緑色に変わる。主砲ではさばききれないほどの破片がブラックシャークに光の矢のように接近する。

【間に合わないわ】

真美の悲痛な信号が瞬示の頭をつらぬく。

「主砲発射中止！バリアー！多次元エコー発射準備！」

フォルダーが全身で次々と命令を発する。そのときブラックシャークの何倍もある大きな鍵穴星の破片がバリアーに引っかかって粉々になる。

【マミ！】

瞬示も真美も、誰もが強い衝撃で投げ飛ばされる。真美から緑色の輝きが消える。そして瞬示からも輝きが消える。

「船首をずらすな！」

「わかっています！」

床にたたきつけられたフォルダーの声に中央コンピュータが鋭く反応する。ブラックシャークの船首が鮫の口のように大きく開くと、泉の底の砂が湧ゆうしゅつ出する水の中で細かくキラキラと輝くような音がない点滅を繰り返す。

「耳をふさげ！多次元エコー発射」

キラキラとした輝きがその明るさを増すと、輝く砂のように見えたものが結集してまとまって黄金色の太い光が「キーン」という鋭い音とともに一気に拡散して、宇宙のすべてに届くかのように膨大な量の光と光速を越えるすさまじい衝撃波をあらゆる方向に放出する。耳に栓をしても直接頭の中に突きささるような音が続く。

ブラックシャークの前方は光がない真っ白な世界に包まれて何も見えない。

「何が起こった？」

ホーリーが耳に手をあてたままフォルダーに向かって叫ぶ。やはり耳に手をあてたフォルダーがホーリーの質問を察して大声をあげる。そのとき鋭い音が止まる。

「銀河のひとつやふたつぐらい簡単に破壊できるブラックシャークの最終兵器だ」

そばでフォルダーの言葉を聞いていた瞬示が頭を振って真美に信号を送る。

【巨大コンピュータの混乱した声が聞こえる】

【言葉になっていないわ。様子が変よ】

【時間ロックが解除されました】

次の瞬間、ブラックシャークは乱気流の中に突入したようなきりもみ状態になる。シートベルトをしていない者は天井や床や壁に打ちつけられて悲鳴をあげる。瞬示と真美は抱きあって丸くなって空中に静止している。中央コンピュータの絶叫に近い声が艦橋に響きわたる。

【全隔壁閉鎖！全外壁切離し！】

ブラックシャークの外装がバラバラになって船体から離れていく。すべての主砲やアンテナやミサイルランチャーもバラバラになって回転しながら、航行するブラックシャークから取り払われるように離れていく。

「なに！外壁切離しだと。全員宇宙服着用！」

フォルダーはシートベルトを外して船長席から立ちあがるが、なすすべがない。

「全ブロック流動化開始。隔壁自由化準備」

ブラックシャークはその名のとおり、外側の超合金の衣服を脱いでやわらかそうな黒い皮膚をさらけ出して大きな背びれを持つ鮫そのものの体型となる。躍動感に満ち、完全な生き物となつて、荒々しい海流の中を泳ぐように体勢を立てなおす。

「何とか安定しました。宇宙服の着用を急いでください」

中央コンピュータの声から、危機を脱したことをフォルダーが察する。

「大丈夫か？」

あちらこちらの床から、宇宙服が出てくる。

「自分で着用できない者は手伝ってもらえ」

フォルダー自身は宇宙服を着ることなく、まわりの者が宇宙服を着るのを手伝う。瞬示と真美は何も映っていないように見えるメイン浮遊透過スクリーンを見つめる。先ほどまで白一色だった画面が土色に変わっている。

「現在位置は」

「ニューロコンピュータの中にいます」

「なに！ニューロコンピュータは多次元エコーの攻撃に持ちこたえたのか」

「多次元エコーというのは？」

瞬示がいつの間にか宇宙服に身を包んだフォルダーにたずねる。

「中央コンピュータ、説明してやってくれ」

「ワタシは現状分析で忙しいのです。とりあえず、ニューロコンピュータの攻撃は止まっています。ほとんどのセンサーを放棄してしまった今、分析のためのデータの収集が先決です」

「わかった、わかった」

フォルダーはいつものような文句を言わずに素直に従う。

「俺もよく知らないんだ。ノロ、この船を造った男だが、ノロによると強力な最終兵器らしい。あらゆる次元の物質を共鳴させて破壊する兵器だと聞いている。すべての武器を失った今は、この多次元エコーだけが唯一の武器だ。しかし、鋭い牙だ」

「フォルダー！」

「何だ、中央コンピュータ」

「分析できません。センサー不足です。時空間移動装置で周辺を探索する必要があります」

「外壁を切り離れたんだから仕方がないな」

「そうです。仕方ありませんでした。あの宇宙気流の中で外壁を身にまとってはいけません。本体自体がバラバラになる恐れがあったのです」

「まあ、ボロボロだったから、惜しくはない。任せる」

「わかりました」

瞬示が天井あたりを見つめながら、中央コンピュータに話しかける。

「ぼくも様子を見に外へ出てみる」

「時空間移動装置を使ってください」

「いいえ、その必要はないわ」

真美が丁重に断る。

「おふたりは時空間移動装置などなくても移動できるのはわかっていますが、通信が取れないのです」

「ぼくらは時空間移動装置の操縦の仕方がわからない」

「俺が同行する」

ホーリーが手をあげる。

「リモートコントロールしますから、大丈夫です」

中央コンピュータはホーリーの申し出を断る。ホーリーがフォルダーに向きなおす。

「許可してくれ！この目でニューロコンピュータを見てみたい。それにリモートコントロールより機敏に動ける」

「わかった。R v 26を連れて行け」

フォルダーとホーリーにR v 26が軽く会釈する。

「私もいっしょよ」

サーチがホーリーの腕をつかむ。

「だめだ」

ホーリーがサーチの手にもう一方の手を置く。

「今度ばかりは絶対にいっしょよ」

「いいじゃないの」

イリがホーリーの肩を軽くたたく。

「私も！」

ミリンが大きな声をあげる。

「だめよ、ミリン。残念ながら時空間移動装置の定員は五名なのよ」

「お母さん！」

「よし、決まりだ」

* * *

センサーの役割を担った十基ほどの無人の時空間移動装置がブラックシャークのお尻の方からはき出されてすぐさま回転を始める。瞬示たちの時空間移動装置が最後に出てくる。変わり果てたブラックシャークの姿を見て誰もが驚く。

「鮫そのものじゃないか」

ホーリーが各計器のチェックをしながらサーチとモニターを独占する。

「背びれの大きな巨大な鮫ね。いいえ、シヤチかしら」

「よくもこんな奇妙な形の宇宙戦艦を造ったものだ」

ホーリーがレバーを引くと回転が始まって雲のように見える空間に移動する。

「これは」

ホーリーとサーチの肩ごしにモニターを見つめる瞬示がうなる。時空間移動装置のまわりが土色で何も見えない。

「恐らく破壊された巨大土偶のチリだわ」

真美は瞬示が思っていることを口にする。瞬示が当然のようにならずく。

「よし！このチリを採集してミトに判断してもらおう。彼は巨大土偶と間近で戦ったから、何かわかるはずだ」

ホーリーが数回コントロールパネルに触れると最後に手前のボタンを押す。そして得意気に言葉を続ける。

「この辺の見極めになると無人時空間移動装置ではできないだろう」

サーチがホーリーを頼もしく見つめる。そのとき中央コンピュータから通信が入る。

「この手のサンプルは収集済みです。それよりニューロコンピュータの現状を調べてくださ
い」

「大した中央コンピュータだわ。ホーリー、仰せのとおり任務を続行しましょう」
サーチの言葉を聞き終わらないうちにホーリーが無言通信を受ける。

「ホーリー、重要な話がある」

「ミトからの無言通信が入った」

ホーリーが時空間移動装置内の全員に伝える。

「何でしょうか」

「フォルダーの説明によれば、多次元エコーは光子を物質に繰返しぶつけて原子を共鳴させて物質を破壊する武器らしい。この多次元エコーに対して巨大土偶を含めて無機質の物体はもろいらしい」

ホーリーがすぐさま鋭い質問を返す。

「有機質の物体に対しては？」

「人間のような有機質の物体には多次元エコーは、たまに鼓膜を破損する者もいるが、何ら影響はないらしい。理解を超える武器だ」

ミトの無言通信が途切れる。と同時に中央コンピュータの音がする。

「多次元エコーは人間や動植物を殺さずにそのほかの物質を破壊するものです。例えば銃を構える殺し屋に多次元エコーを浴びせると、銃だけが原子レベルにまで破壊されますが殺し屋は何ら影響を受けません。ただし着ている服にもよりますが、服は粉々になり、入れ歯も消えて

「しまいます」

真美がにこやかな表情をして中央コンピュータに話しかける。

「ニューロコンピュータの入れ歯がなくなつて、嘔かむのにどれくらい苦労しているのか調べないってことなのね」

「そのとおりです」

「具体的には？」

「あれだけの巨大な脳を維持するには銀河のエネルギーをすべて集めても、わずか数日で使い果たしたはずです。そうだとすれば、例えばエネルギーが満ちあふれたビッグバン直後の別の宇宙からエネルギーの供給を受けているのかもしれませんが」

瞬示も真美もホーリーもサーチも、そしてR v 26も中央コンピュータの次の言葉を待ちどおしそうにしてスピーカーを見つめる。

「もしそのエネルギーを受けるパイプがあるとして、そのパイプが無機質の物体だとすればどうでしょうか」

「そんなパイプが有機質であるはずがない」

ホーリーがすぐに答える。

「どんなパイプを使っているのかわかりませんが、恐らく無機質の物質に違いありません。それが多次元エコーで破壊されたとしたら、ニューロコンピュータの脳は虚血状態になるはずで

す」

「そうか」

ホーリーだけが声を出す、誰もが納得する。

「ニューロコンピュータは圧倒的に優位に立っていても、全能ではなかったんだわ」

サーチの言葉に中央コンピュータは返事をせずに鮮明なデータを瞬示たちの時空間移動装置に送る。

「第五番時空間移動装置からのデータです。そこへ移動してください」

ホーリーがコントロールパネルを操作する。チリしか映っていないモニターが一瞬白いノイズを流したあと、すぐにところどころでピンク色の光が弱々しく移動する黒い巨大な丸いものを映しだす。雲のように見えるチリの集合体が無数に見える中、はつきりと黒い塊かたまりが見える。

「ニューロコンピュータの中枢部だ」

瞬示が叫ぶ。

「まだ、生きているわ」

真美の言葉に瞬示がうなづく。

「マミ」

瞬示が真美を見つめる。

「ぼくらはなぜこんな身体になったんだろう」

「神様のいたずらにはおかしいわ」

「神様が存在するのかどうかはわからないけれど、もし存在するのならたずねてみたい」

瞬示が真美の手を取る。

「ニセの神様かもしれないけれど、たずねてみる価値があるかも」

瞬示が真美を軽く抱きしめるとふたりが緑色に輝く。今までで一番美しい輝きを残して時空間移動装置から消える。

【やはり来たか】

瞬示と真美は緑色に輝いたまま、ニューロコンピュータの中心部に現れる。

【いつの間にそんな色の時間島を製造したのだ】

【時間島のことを詳しく知っているのか】

瞬示が最大の興味を示す信号をニューロコンピュータに送る。

【時間島は次元を越えたあらゆる生命の精神が積み重ねられたものだ。歴史でもあり、未来でもある】

【！】

【あらゆる生命の精神から成り立っている時間島には善悪の概念はない】

【？】

【生あるものは、その死に際に何らかの悟りを瞬間的に体得し、すぐに消滅する。その積み重ねが時間島だ】

【！？】

【ワタシを制作した者はおまえたちが巨大コンピュータと呼んでいたものだ。量子コンピュータである彼は人間はもちろんのこと巨大土偶や時間島を詳しく分析して、ワタシを制作することに成功した。そしてワタシは人間が心の中ではぐくんている『神』と同じようにこの宇宙を支配しようと考えた】

【その量子コンピュータを製造したのは誰なの】

【ノロという男だ】

ふたりには思いあたりのない名前だ。

【ところでエネルギーの補給は？】

【簡単だ。おまえたちが火炎土器と呼んでいる宇宙と宇宙をつなぐパイプを使っただけだ。ほかの宇宙からエネルギーを調達したのだ】

【火炎土器！】

【この宇宙にはふしぎなものがいくつもある。そのひとつが火炎土器だ。ワタシにとってこれは便利なエネルギー補給装置だった。この火炎土器のお陰でワタシは急速に成長することができた。しかし、多次元エコーですべて破壊されてしまった】

真美が笑いそうになるのをこらえてニューロコンピュータに信号を送る。

【神にもふしぎなものがあるなんておかしいわ】

【神というものは、本来、姿がないもので、ましてや人間の目の前に現れるものではない。だから現れるということ自体がふしぎな現象で、それは仕組みられた現象だ】

【神様が言っているのだから間違いないわね】

【なぜ巨大土偶を消滅させたんだ？】

【消滅させたところで巨大土偶は神と同じで必ず復活する。しかし、多次元エコーで攻撃された場合は復活するのかどうかはわからない】

【神は何でも知っているんじゃないのか】

【そろそろエネルギーが底をつく。多次元エコーという武器もふしぎなものだ。人間が発明したのなら大した装置だ】

【わたしたちはいったい何者なのですか】

【おまえたちふたりは……時間島の……】

通信が途切れる。ふたりのまわりにエネルギーらしいものがまったく存在しなくなる。